

修正された本年度の

聯邦政府豫算發表

歳出入が平衡したと

ロスチャイルドから祝電

去日聯邦政府の一九三一年度歳出入豫算が公表された。これは理想政治を標榜する革命臨時政府第二回目の修正豫算の發表で、之によつて聯邦政府の眞意が露見するを知らしめることが出来た。...

ウイタクル大蔵卿は本豫算を本額四十四億二千九百七十九万九千九百九十九元と見做す。更にマツチ製造所が提出した、其説明書によると...

五里霧中の間に迷ふ

伯國財界の前途

近く意見書發表

財政顧問ニーマイヤ氏

公布日未定の

聯邦執政官法

來伯國は直ぐに伯國の財界の間に迷ふ。伯國の財界の前途は、伯國の政治の前途に對しては、伯國の政治の前途に對しては、伯國の政治の前途に對しては...

革命特別裁判所

新聞買収費用問題で

ベ氏いためらる

事件の山積する

新新聞買収費用問題で

ベ氏いためらる

事件の山積する

新新聞買収費用問題で

ベ氏いためらる

事件の山積する

新新聞買収費用問題で

ベ氏いためらる

事件の山積する

新新聞買収費用問題で

ベ氏いためらる

事件の山積する

CASA TOZAN MIZUKAMI & CIA. COMMISSARIOS Rua Cidade de Toledo, 25 Caixa, 911-Tel. 2837-End. Tel. "Tozan" SANTOS

経済略史 第三帝政時代の経済状態 開闢すべからざる關係がある。即ち彼のエウゼビオ・デ・テロス...

BANCO ESPECIE DE YOKOHAMA, LTD. (THE YOKOHAMA SPECIE BANK, LTD.) Rua da Candelaria No. 28 CAIXA POSTAL, 380 - RIO DE JANEIRO

日伯社 鮮明、迅速、廉價 印刷物は、鮮明、迅速、廉價。封筒、用箋、ゴム印、帳簿、紙幣、一切の御用命を承ります。

大商船株式會社 日本へ一番早く着く 優秀な新造客船 「命令定期毎月一回」









# 探偵 女は解らぬ

加藤久美

(上)

「女は解らぬ」といふのは、探偵小説の一種である。探偵小説の目的は、犯罪の真相を明らかにすることである。そのためには、犯罪の動機、手口、犯人の所在などを明らかにしなければならない。探偵小説の面白さは、その謎解りにある。読者は、探偵の活躍を期待しながら、謎を解いていくのである。

この探偵小説「女は解らぬ」は、加藤久美の代表作である。この小説は、ある女性の死をめぐって展開される。探偵は、この謎を解くために、さまざまな手がかりをたどっていく。その過程で、探偵は、犯罪の真相を徐々に明らかにしていく。最終的には、犯人の正体を突き止めるのである。

「女は解らぬ」といふのは、探偵小説の一種である。探偵小説の目的は、犯罪の真相を明らかにすることである。そのためには、犯罪の動機、手口、犯人の所在などを明らかにしなければならない。探偵小説の面白さは、その謎解りにある。読者は、探偵の活躍を期待しながら、謎を解いていくのである。

この探偵小説「女は解らぬ」は、加藤久美の代表作である。この小説は、ある女性の死をめぐって展開される。探偵は、この謎を解くために、さまざまな手がかりをたどっていく。その過程で、探偵は、犯罪の真相を徐々に明らかにしていく。最終的には、犯人の正体を突き止めるのである。

「女は解らぬ」といふのは、探偵小説の一種である。探偵小説の目的は、犯罪の真相を明らかにすることである。そのためには、犯罪の動機、手口、犯人の所在などを明らかにしなければならない。探偵小説の面白さは、その謎解りにある。読者は、探偵の活躍を期待しながら、謎を解いていくのである。

この探偵小説「女は解らぬ」は、加藤久美の代表作である。この小説は、ある女性の死をめぐって展開される。探偵は、この謎を解くために、さまざまな手がかりをたどっていく。その過程で、探偵は、犯罪の真相を徐々に明らかにしていく。最終的には、犯人の正体を突き止めるのである。

「女は解らぬ」といふのは、探偵小説の一種である。探偵小説の目的は、犯罪の真相を明らかにすることである。そのためには、犯罪の動機、手口、犯人の所在などを明らかにしなければならない。探偵小説の面白さは、その謎解りにある。読者は、探偵の活躍を期待しながら、謎を解いていくのである。

この探偵小説「女は解らぬ」は、加藤久美の代表作である。この小説は、ある女性の死をめぐって展開される。探偵は、この謎を解くために、さまざまな手がかりをたどっていく。その過程で、探偵は、犯罪の真相を徐々に明らかにしていく。最終的には、犯人の正体を突き止めるのである。

**MOVEIS**  
カサトキョウ  
R. Sta. Ephiqenta, 11-A  
Tel. 4-6457 Catxa, 1005

「女は解らぬ」といふのは、探偵小説の一種である。探偵小説の目的は、犯罪の真相を明らかにすることである。そのためには、犯罪の動機、手口、犯人の所在などを明らかにしなければならない。探偵小説の面白さは、その謎解りにある。読者は、探偵の活躍を期待しながら、謎を解いていくのである。

この探偵小説「女は解らぬ」は、加藤久美の代表作である。この小説は、ある女性の死をめぐって展開される。探偵は、この謎を解くために、さまざまな手がかりをたどっていく。その過程で、探偵は、犯罪の真相を徐々に明らかにしていく。最終的には、犯人の正体を突き止めるのである。

**1932年**  
フオリーニヤ  
聖市郵箱三七五

**尋人**  
三原 未松  
日本総領事館

**尋人**  
日本総領事館

**CASA UEHARA**  
店商原上  
六ノロブンテケ・デ・テツセ・ゴルラ

**CASA ORIENTAL**  
商貨雜及品料食  
一清川品

**CASA REA**  
FOGAO PAULISTA  
Rua Xavier de Toledo, 29 Tel. 4-1745

**ロツテ**  
Dr. Messano  
Rua Consolacao, 104

**Dr. Palamone**  
眼科専門  
アララツアララ

**Dentista**  
Villa Nipolandia  
伊藤達馬

**御旅館**  
北田清吉  
アラサツアラ

**珈琲園賣却**  
位置アララツアラ

**土地貸したし**  
米、バタタ、果實に  
好適の土地特に日  
本人家族に賃貸し  
たし、聖市より僅  
か一時間半

**Pharmacia Popular**  
DE HOEFPNER & SILVEIRA  
Av. Minas Geraes-Promissão - Caixa, 101

**Dr. H. SAITO**  
MEDICO  
Rua da Inconfidencia, 6-35  
士藤齋

**Dr. K. DAIAN**  
MEDICO  
ARAQATUBA  
八喜庵大

**Hotel Japão**  
Mario H. Arita  
日本旅館

**成功館**  
古謝將義  
電話 二〇〇八

**HOTEL PAZ**  
Praça José Bonifacio, 51  
SANTOS  
ホテル平和

**日本旅館**  
沖山心平

**ホテル・プログレツツ**  
尾崎

**佐藤商店**  
電話 一三〇四

**御洋服の御調製は**  
矢部洋服店で

**Hotel Fuzi**  
ARAQATUBA  
御旅館不二

# 農業の實習を兼ねた 海興の育英事業

## 中堅となる指導者を養成 在留同胞中からも募集

在留同胞は大部分純農業者のみで人口の増加に伴い産業組合や青年團を設けるなど團體生活を営む必要が起り、これら農民以外に知識、技能を有する指導者を求める事が同團體の発展上急務となつたので、海外興業會社では今年最初の試みとして聖市郊外イムゾイの概算百アルケレスの土地に農業實習場設立の計画を樹てかねて外務省に申請中であるが、認可されたので、拓務省より昭和五年に三萬圓の補助を受けて目下建築中であるが、九月から開場の運びとなつた。

今該實習場に關しサンパウロ市海興支店に於て専らその任に當つてゐる松本氏を訪へば

日本内地に於ける中等程度以上の教育を受けた青年及び同程度の在留子弟を入場せしめ、主として品性の陶冶を行はしむると共に農場實習により農業經營の實地を體驗せしめ、將來在留同胞の中堅となつて活動し得べき人材を養成しようとするのが目的です。

大體の案が内地で作成された關係上、それをそのままに據此處で實施する場合は未だ研究の餘地が充分あるやうに思ふ。在留同胞の子弟中から十八ばかり募集する予定であるが、日本に於ける同等程度の資格を要求するは當然無理の事故便宜な方法を設ける考へて近くこの打合せを行ふ事となつてゐる。日本に於ては今月末に入場希望者の申込受付を締切ると、當地では渡航日数を見越して今このところ未定だが月末までは詳細の發表が出来ると思ふ。

冒頭つてゐた。参考までに海興會社が設けるに決定するといふ入場生の資格を示せば

一 乙種農學校卒業又は之と同等以上の學力ありと認めたるものにして次男以下の者但し長男と雖も父母と共に渡伯し又は父母在住する者はこの限に非ず、年齢 満十歳以上二十五歳未満の者

二 身體強健志操堅實にしてブラジル國に永住の意志堅きもの、資金 三百圓以上を本社に供託し得るもの但し供託金の中二百圓は最初の一年に於ける食費他の百圓は日用雜費に充つるため豫備金として保管す、保證人 本社の相當と認むる身元引受保證人あるもの

である。教科課程としてはブラジル語と實習作業に殆んど全部時間を費し、其他道德、ブラ

### 此の良き経験を 隣人にまで及ぼせ

川西總領事代理の祝辭  
コチア農産物品評會



コチア青年會主催、聖市郊外農産物品評會の賞品賞状授與式は昨十三日午後三時三十分から會場内のコチア・パタ、生産組合倉庫内に於て舉行された。

### 旅先から

(第一信) 三浦 聖

【前承】ボア・ウイアジェン、ア・ア・ボルクで刑事連中は下船した。船は夜の十時に出帆し、事務長の話に、私の切符と旅券とを持って来た者は、眼鏡をかけた四角な顔をした男と長身の瘦せた男とで、共に若い日本人であつた。多分岸本に齊藤氏であらう。

さて、船に乗せられたまでは一日用雜費に充つるため豫備金として保管す、保證人 本社の相當と認むる身元引受保證人あるもの

である。教科課程としてはブラジル語と實習作業に殆んど全部時間を費し、其他道德、ブラ

### 日本俱樂部の 大会

日本俱樂部では来る十六日午後二時から第一回ビンボン大会を十七日に於て昭和六年度足球クランシイカンを舉行する事となつた。猶ビンボン大会には参加申込金三ミルを要する由で、終了後ビンボンの催しがあり婦人の來會を希望してゐる。

### 土地賣り度し

サントス街道、サンタマロ湖水附近の土地半アルケル、二室付の新築家屋あり、値段格安特に御相談に應ず。詳細は御面談の上

Rua Voluntarios da Patria, 350  
SÃO PAULO

月、水、金三時より九時まで  
火、土、日三時より九時まで  
火、水、土、日三時より九時まで

公告

静岡縣原部郡村大字坂部三、七八五番  
大石 武  
明治四十四年十月六日生  
右の方に對し急用を所願本人若しくは同氏の現住所御承知の向は當縣宛至急御一報被下候

昭和六年五月七日  
在リベロン・アレイト  
日本總領事館分館

漆器に經驗ある方を求む

御希望の方は経歴及び技術等に付詳細を認郵便にて至急左記に照會ありし

聖市郊外リベロン・アレイト  
中山漆器工場  
S.M. NAKAYAMA  
Ribeirão Pires L. S. P. R.

Armazem Registro  
Rua Bittencourt, 297 SANTOS  
農産品肥料  
委託販賣業  
栗田平一  
サントス市ビイテンコウルテ街二九七

郊外土地  
果樹、野菜等に好適  
の近郊にある數ヶ所の土地を好條件にて御世話致します。詳細は直接御來談下さい

氏原彦馬  
聖市トリス・デ・ヂセン  
プロ梅十二番五階四號室

Colonial "Limocca"  
己自の土地所有者ならば不景氣も平氣なり、五アルケル以上備へ一コント、停車場より四キロ、森林あり地種確實、生涯の保障の爲是非地主となられよ、委しくは左記へ御來會ありし、毎日午後二時より六時まで  
Rua Liberto Bader, 40, 3 and. sala. 16, S. Paulo

HOTEL SÃO PAULO  
Rua General Osorio, 24  
PHONE. 890  
Ribeirão Preto

御旅館サンパウロ  
Ribeirão Preto 停車場通二四  
電話：三三九〇〇

HOTEL MARILIA  
Est. Marilia

新しい原料で美味・即席珍らしい  
「そば」「うどん」「すきやき」  
和洋御料理 サントス市街  
サンパウロ 池田政雄

HOTEL CAMBARÁ  
Caixa, 109 -  
MASSAO IKEDA  
Camborá L. S. P. P.

ホテルカムバラ  
サンパウロ 池田政雄

Vendem-se ou Arrendam-se  
PRÓPRIEDADE DO DR. CUNHA MENDE  
PRÓXIMO EST. DE CAMPO LIMPO

土地、賣又は貸  
カンポ・リムポ驛より五キロの土地、地味肥沃、五十アルケル以上上貨地に應ず  
交通至便にて市場積出に有利  
賣却好條件にて御相談に應じます。

一度御視察下さい  
申込所 大谷勝市  
Est. Campo Limpo, S. P. R.

ALMEIDA LAND & CIA.  
Rua Florencio de Abreu, 33-35 - São Paulo

珈琲採取用  
サツコ  
専門店

本綿のパンノ及びサツコの御用は、殆んど全伯國一手引受の當店へ御用命下さい。大量生産に依る廉價で御需要に應じます

見本は御申越次第進呈  
聖市フロレンシオン  
アルメイダ  
ランド商會

チブス豫防注射薬配付に就て

今年二月以來各地からチブス豫防注射薬配付の申込がありまして本會では其都度衛生局へ下附請願書を提出し既に四千八十分以上に達して居りますが衛生局では薬品がなかつて今日までまだ下に達して居らず從つて申込者に對し薬品の送付が出来ないのを誠に御氣の毒に思つて居ます、斯よ云ふ事情ですから今の結果していつ配付出来るか判然としませんが兎に角下附になり次第御送付しますから左様御承知願ひます

荷無料配付印刷物中「ブラジルの毒蛇に關する素人向智識」マレタをどうするか「チブスはどうか」は既に品切れになりました事を序に御知らせして置きます

一九三一年五月十日  
在ブラジル日本人同仁會

Sociedade de Productos Chimicos  
"L. QUEIROZ"  
Rua S. Bento, 63 Caixa Postal, 255 S. Paulo  
Pinheiros 販賣所 Rua do Comercio, 160

肥料  
含有量  
十八ポルセント  
一トン 二九五〇〇〇

各種共當店にて常に研究して居りますから是非當店に御相談下さい

# NIPPAK SHIMBUN

Jornal Japonês de maior circulação no Brasil

Anno XVII

São Paulo — Quinta-feira, 14 de Maio de 1931

Num. 728

## NIPPAK SHIMBUN

Director - Gerente:

ALFREDO TAKEUCHI

Redactor da pagina brasileira José Solé

Redacção, Administração e Officinas  
Rua da Liberdade, 146  
Caixa Postal, 375  
Telephone, 2-3926

Endereço Telephonico "NIPPAK"  
SÃO PAULO - BRASIL

### ASSIGNATURAS

Para o Brasil:

Por anno . . . . . 30\$000  
Por semestre . . . . . 16\$000  
Numero avulso . . . . . \$500

Para o Exterior:

Por anno . . . . . 60\$000

### ANUNCIOS

Temos á disposição dos interessados uma tabella completa de preços para anuncios nestafolha. Telephone 2-3926

## Escreituração nas fazendas e propriedades agricolas

O sr. dr. Dutra Rodrigues, advogado-chefe da Secção de Assistência Social, do Departamento do Trabalho Agrícola, dirigiu um aviso aos srs. prefeitos municipais, a proposito da escreituração agricola nas fazendas, esclarecendo os seguintes pontos:

1 — Os proprietarios agricolas são obrigados a fornecer a seus trabalhadores, de qualquer categoria, cadernetas em que, além do respectivo contrato, constará o debito e credito de suas transacções:

2 — A escreituração de cadernetas, que serão rubricadas pelos patrões ou seus prepostos, deve ser balanceada, com declaração do saldo devedor ou credor do trabalhador, por occasião dos pagamentos parciais, encerrada por occasião de findar o contrato:

3 — Cada lavrador deve possuir, para sua escreituração, um livro de contas correntes.

## Scientista japonês

A bordo do "Buenos Aires Maru" chegou ao Rio, o sr. Manabe Kiyoshi, notavel medico japonês, do Instituto de Molestias Tropicais de Tokio, que vem realizar, em nossa terra, estudos sobre a especialidade a que se dedica. O referido cientista, que pela primeira vez vem ao Brasil, se demorará o tempo necessario para realizar pesquisas e estudos sobre molestias tropicais. Irá, provavelmente, visitar alguns Estados regressando em seguida ao Japão.

## Noticias e telegrammas do Japão

(Serviço especial do NIPPAK SHIMBUN e dos Jornaes)

### TEMPESTADE

Grandes prejuizos causados pela tempestade

Telegramma de Tokio anuncia que diversas partes do Japão acabam de ser varridas por violenta tempestade, que veio agravar consideravelmente os danos causados pela ultima secca. Em diversos pontos das ilhas assignalam-se vasos e ferriveis incendiados, avalliam-se em 62.000.000 de francos os danos verificados. A estação thermal de Yamanaka ficára reduzida a escombros.

Em Yokoama foram devorados pelas chammas cerca de 50 predios, entre os quaes o do consulado da China. O total das victimas é de 20 mortos e de cerca de 100 feridos, alguns dos quaes gravemente.

1.300 casas destruidas por incendio

YAMANAKA, Prefeitura de Ishikawa, 7 — Um incendio destruiu setecentas das 1.300 casas da cidade, provocando a morte de tres pessoas e ferimentos graves em outras cem. Tres mil e quinhentas pessoas estão sem abrigo.

Dominado o pavoroso incendio de Yamanaka

TOKIO, 8 — Após cinco horas de ingentes esforços, os bombeiros, auxiliados por toda a população valida, lograram dominar o pavoroso incendio de Yamanaka.

As chammas, bafadas por forte ventania, finham-se alastrada com incrível rapidez, devorando cerca de mil habitações. Receava-se que fosse elevado o numero de victimas.

### 800 MINEIROS EM GREVE

Tokio, 11 — Declararam-se em greve 800 operarios das minas da região de Fu-Kue, que, talvez, venham a ser acompanhados, nesse acto, por todos os mineiros de Kyu-Shu, num total de 120.000. A policia está agindo contra os grevistas mais exaltados, tendo detido 50 que foram encontrados com armas.

### Esquadra japoneza em visita a Italia

Chegou a Napoles sob o pavilhão do almirante Seizo Sakonji, uma esquadra japoneza composta dos navios escolas «Izum» e «Vakumo», procedente de Port Said, que está fazendo um cruzeiro de instrucção.

O almirante Sakonji acompanhado por todo o estado maior, visitou o almirante Nicastro, chefe da base naval e as autoridades locais.

A municipalidade offereceu aos officiaes japonezes um espectáculo de gala no Theatro S. Carlo. 230 officiaes e guarda marinhas seguiram para Roma onde tiveram uma calorosa recepção por parte dos collegas italianos.

Os visitantes fizeram presente ao sr. Mussolini de um quadro representando a batalha entre os «Samurais» em 1.500.

Em seguida a esse acto dirigiram-se ao Ministerio da Marinha de onde, em companhia do titular da pasta, assistiram ao desfile dos cadetes japonezes, entre aclamações da multidão.

### Os futebolistas japonezes venceram os Yugo-Slavos

No grande embate entre os futebolistas nipponicos e os yugo-slavos, realizado a 11 do corrente em Belgrado, sahiram vencedores os primeiros, pela contagem magnifica de 3 a 0.

### AVIAÇÃO

#### Rumo aos Estados Unidos

Sieji Yoshihara, joven aviador japonês que conta apenas 27 annos de idade, está tentando um vôo do Japão aos Estados Unidos através do pacifico, num percurso de 2.263 kilometros.

A 4 do corrente partiu o denodado aviador de Tokio para Numazaki, e daquela cidade para a de Nemuro, na ilha de Yezo, onde aterrou no aerodromo local, vencendo assim a segunda etapa do reide. O vôo proseguirá em demanda do archipelago Aleutas.

#### Reide Paris-Tokio sem escalas

Tokio, 9 — Os aviadores francezes Le Brix e Codos pretendem realizar um vôo de Paris a esta capital sem escalas, tendo já pedido a necessaria licença ao governo japonês.

Sabe-se mais que caso sejam bem succedidos nessa tentativa os dois «azes» francezes tentarão a travessia do Pacifico.

### Revelações sobre o Cinema

A cinematographia no grande imperio nipponico desenvolve-se de maneira formidavel, apesar da crise economica e da terrivel concurrencia dos filmes norte-americanos. Varias sociedades, com grandes capitais, iniciam agora os primeiros filmes sonóros e falados no Japão.

A senhora Kikou Yamata, «a mais parisienne das japonezas», regressando de um passeio a sua terra, deu a uma revista cinematographica franceza, uma serie de impressões sobre o desenvolvimento do cinema japonês.

Resumimos algumas dellas:

«O primeiro filme sonoro japonês foi apresentada no anno passado em Tokio: «A filha do Capitão», tendo no principal papel feminino a linda estrella Yaeko Mizoutani. Um filme melhor será apresentado brevemente, mas a produção de Hollywood continua a ser a favorita, apesar da lingua ingleza.

As grandes companhias cinematographicas japonezas não se consideram vencidas. A Nikatsou editou este anno «Paiz natal», baseada na romanza do mesmo nome posta em voga pelo tenor Foujiwara, que acaba de voltar da Italia. Sua voz quente e expressiva encanta hoje todo o Japão musical e o publico acolheu entusiasticamente esse filme.

A «Teikoku Kinema» contratou para trabalhar com Foujiwara a famosa cantora Toshiko Sékiya, tambem recentemente chegada da Italia. O director de scena está estudando a montagem deste filme em Hollywood, realizando-o depois em sua terra.

Todas as companhias cinematographicas ingressam no cinema sonoro e estão modificando seus «studios».

Tão aperfeiçoado como o Pigalle, mais vasto que o Gaumont, eis o que será o cinema «Gekyo». Dispõe de todas as commodidades dos cinemas norte-americanos. Uma passagem sub-terranea fará a sua ligação com as principais estações ferroviarias de Tokio. As avenidas que o cercam medem de quinze a 36 metros. O cinema será provido de grandes orgãos e de tres «ecrans» para os filmes communs, os sonóros e os que exijam magnoscopios.

Além diss o «Gekyo» possuirá uma série de restaurants e clubes, cozinha europeia, chineza e japoneza. Salas de banho, lojas, cabines telephonicas e agencias bancanas.

(d'A Folha)

## A SAFRA DE ARROZ

O tempo tem corrido optimamente para a cultura do arroz, tanto no nosso Estado como nos outros.

A area plantada com arroz em S. Paulo é muito maior do que a até agora annualmente occupada por essa cultura. Pode-se calcular que a safra de arroz paulista orçará talvez para mais de 10.000.000 de saccas.

Predominarão as qualidades superiores e boas proprias para a exportação.

Já vão sendo entabulados negocios para que o excesso da produção seja exportado para o estrangeiro onde o arroz paulista superior e bom tem optima accitação em varios mercados.

Ao contrario dos arrozeiros do Rio Grande do Sul, os paulistas empenham-se em collocar o excesso da produção evitando a intervenção do governo.

Os arrozeiros gauchos dirigiram ao interventor do seu Estado um memorial pedindo que intervenha junto ao governo federal para que seja instituido um premio de exportação por sacca pondo desde já á disposição do Syndicato Arrozeiro do Rio Grande do Sul, no Banco do Brasil, a quantia de cinco mil contos para pagamento de premios de exportação para o estrangeiro.

Para indemnizar-se dessa quania, o governo da União instituiria a taxa de 500 réis por sacco de arroz em casca de 50 kilos produzido no territorio brasileiro, taxa essa de «Defesa» que viria recahir sobre o productor.

Se os productores riograndenses lutam com superprodução, devem seguir a orientação paulista que não cogita de premios muito menos de affectar os plantadores de arroz de São Paulo, na sua moioria pequenos sítiantes que de tudo cultivam a par do café.

O Rio Grande do Sul colherá cerca de 4.000.000 de saccas, quando São Paulo, como foi dito, colherá acima de 10.000.000.

Esse premio pedido ao governo da União é a titulo de «protecção á lavoura» quando, se concedido nos termos do memorial, seria um imposto cobrado de todos os plantadores de arroz do Brasil, recahido sobre o producto bruto e o premio fixado a criterio do Syndicato e do governo, favorecendo o producto beneficiado, o qual não será exportado pelos lavradores.

Syndicato arrozeiro só existe no Rio Grande do Sul. Por que razão favorecer com uma contribuição geral uma unica fracção dos productores brasileiros de arroz?

Não é justo que todos os lavradores de todos os Estados que lutam com mesmas difficuldades dos riograndenses venham a ser sacrificados numo época em que os productos agricolas em geral pouco lucro deixam ao lavrador quando não deixam prejuizo por se deteriorarem nas tulhas ou por falta de transportes.

Esse imposto de 500 réis por sacca de arroz em casca só poderia ser cobrado pela avaliação das colheitas pela area cultivada.

Os lavradores que tivessem prejuizo por intemperies ou por faltas de transportes ou nenhum lucro pela exiguidade dos preços, ainda por cima teriam que pagar essa multa ao trabalho.

Se ha necessidade de defesa de um producto de cultura annual, cada interessado que a organise sem que venha affectar o interesse de outros.

## Exposição Agricola NO "BUENOS AIRES MARU"

A «Associação dos Moços Japonezes de Cotia» innaugurou, hontem, em Pinheiros, arrabalde desta capital, uma exposição agricola, organizada com o fim de estimular os agricultores a cuidarem da boa qualidade das suas produções, para o que será conferido ao expositor do melhor artigo uma medalha de ouro e outra de prata.

Essa exposição está sendo realizada no pavilhão da «Sociedade Cooperativa dos Productores de Batata em Cotia», á rua Pedro Christie n. 1, em Pinheiros, enviando o seu presidente sr. Masao Ayukawa, todos seus esforços para o bom exito desse certamen para prosperidade dos agricultores nipponicos.

Compõem-se a comissão julgadora dos negociantes srs. F. Bartolo Filho, José Carvajal, João Rodrigues, Raphael Guerrero e Homei Yamamoto.

Deu entrada as 7 no porto de Rio de Janeiro o «Buenos Aires Maru», vindo de Kobe e tendo feito escalas pelos portos de costume.

Ao largo recebeu o paquete japonês a visita regulamentar das autoridades maritimas e, uma vez desembarcado, foi atracar ao Cães do Porto.

O «Buenos Aires Maru» transportou poucos passageiros para o Rio e conduz muitos em transitio. Nota-se dentre estes o sr. Nyakosri Chibata, novo primeiro secretario da legação japoneza na Republica argentina.

Foi passageiro para o Rio o dr. Manabe Kiyoshi, medico nipponico, do Instituto de Molestias Tropicais de Tokio.

### DR. S. TAKAOKA

MEDICO-OPERADOR

Rua Fagundes, 8

Tel. 7-4683

S. PAULO

## A Imprensa Japoneza

A opulencia da imprensa no Imperio japonês  
Uma guerra entre jornaes

mente, em Osaka, séde dos pujantes trusts: o «Osaka Mainichi» e o «Osaka Asahi», cuja fecunda concurrencia constitue uma das razões principais dos enormes progressos verificados na imprensa nipponica. Cada um dos dois trusts controlla dois jornaes. Sob a insignia do «Osaka Mainichi», militam o «Osaka Mainichi», com um milhão e quinhentos mil exemplares de tiragem, e o «Tokio Nichi-Nichi», com oitocentos mil numeros diarios. As mesmas cifras comprovam a importancia do «Osaka Asahi» e do «Tokio Asahi».

Póde parecer estranho que, sendo Tokio a capital do Imperio, estejam em Osaka as mais poderosas organizações jornalistas do Japão. Mas esta aparente anomalia encontra a sua justificativa no incremento industrial do Japão sul-occidental, no rapido desenvolvimento do porto de Kobe e no aumento dos habitantes da Coréa e da Mandchuria. Além disso, enquanto Tokio está cheia de pequenos jornaes que encontram a sua razão de ser na athmosfera politica da capital, em Osaka as folhas de menor importancia podem ser contadas nos dedos de u'a mão.

A expansão soberba da imprensa indigena collocou, mesmo, os jornaes ingleses numa situação nitidamente inferior deante dos grandes jornaes nipponicos.

A prova disso está em que o jornal em lingua ingleza mais procurado pela colônia britannica, em vez de ser um orgam dirigido e financiado por elementos anglo-saxões, é uma edição estrangeira do «Osaka Mainichi».

### A guerra dos jornaes

A historia do jornalismo japonês contemporaneo se resume no conflicto entre os dois grandes trusts de Osaka, conflito no qual os dois adversarios se empenham vivamente, num esforço constante de cada um para vencer o outro em novos melhoramentos. Faz nove annos, por exemplo, que o «Osaka Mainichi» construiu um magnifico palacio de cinco andares, no qual despendeu a somma aproximada de treze mil contos. A construção do edificio ainda não estava terminada e já começava a surgir, em escala ainda mais imponente, a séde do «Tokio Nichi-Nichi». Não era possível que o «Asahi» deixasse sem replica esse duplo desafio. E logo se preparou para levantar um novo palacio de oito andares, cujo custo pasou de quinze mil contos.

Não é este, porém, o unico episodio da guerra surda, mas encarniçada, que sustentam os dois formidaveis consorcios jornalisticos e da qual resultam para o publico beneficios consideraveis.

Quando em 1924, o «Mainichi» enviou um hydro-avião, em missão de propaganda, a todas as ilhas principais do Imperio, o «Asahi» logo deu a resposta, mandando um aeroplano de Tokio a Paris, através da Siberia e da Russia. Isso foi o bastante para que o «Mainichi» adquirisse uma esquadilha de cinco aparelhos, para effeitos de publicidade e para transportar photographias e noticia entre Osaka e Tokio. Em seguida o Asahi instituiu entre as duas cidades um serviço portal aereo, para o seu uso particular.

(Continúa)

Ha pouco tempo publicamos um telegramma com referencias altamente elogiosas á imprensa do Imperio Sol Nascente, e prometemos voltar ao assumpto. Cumprindo, hoje, essa promessa o fazemos transcrevendo, na integra, o artigo publicado no suplemento dominical do «Diano de S. Paulo».

«A respeito da imprensa no Japão encontramos na interessante «Le Revista Del Popolo» de Italia», notas muito curiosas de que nos servimos para dar aos leitores as considerações que se seguem:

Quando estudamos as cifras que documentam o thema vasto da industria jornalistica do Japão, todas as surpresas se justificam. Não é espantoso que num paiz de extensão territorial relativamente pequena, cuja população não vae muito além, de sessenta e cinco milhões de almas, existam nada menos de 1137 diarios e de 2850 revistas hebdomedarias e mensaes? E' possível que a diffusão dos jornaes nipponicos atinja um total de dez milhões de exemplares por dia, o que significa um jornal para cada seis habitantes?

A surpresa é legitima, mas é indispensavel considerar-se dois factos: primeiro, que os jornaes japonezes suportam firmemente um confronto, pela modernidade do serviço graphico e pela riqueza e precisão de informações, com os maiores diarios americanos e europeus; segundo, que a população escolar do Japão é calculada em dez milhões e quinhentos mil estudantes, distribuidos em quarenta e quatro mil collegios. E' conveim acrescentar que o japonês é um antrepido devorador de livros. O numero de volumes publicados annualmente é bastante para alimentar uma industria muito prospera. Basta dizer que o maior contribuinte para as paginas de anuncio dos jornaes são os editores e os livreiros.

Se a circulação total dos diarios japonezes vae além de dez milhões das exemplares, cerca da metade de tal cifra é representada pelos dez grandes jornaes que se publicam em Tokio e, especial-